

じく「たけとも」による建設や地元で採れる竹を用いた集会所「竹の会所」は、東日本大震災によって壊滅的打撃を受けた地域に被災者が「集まる場所」を提供し、さらにそこでおこなってきた学生と地域の人々との交流活動が評価された。とくに「竹の会所」はJIA日本建築大賞も受賞し、「竹の会所」と同じく陶器浩一教授、永井拓生助教らと学生のチームによって気仙沼市で進められているプロジェクト「IRONY STATIONs」がSDレビュー2012展にて朝倉賞を受賞するなど、学生をまきこんだ活動が社会的にもおおいに評価された。

この他にも本学科には、「DANWASHITSU」など学生主体のグループがたくさんあり、活発な活動をおこなっている。また、本学科では開学以来、卒業研究・卒業制作の発表会は学生が主体的に運営している。本年も、論文・作品を仕上げていくなかで、発表会場の設営から、ゲストの招聘から広報にいたるまで会を運営した。この一年は、こうした本学科伝統ともいべき学生の自主的・積極的な姿勢が、大きな受賞として結実した年だったといえるのではなかろうか。これからも、「人が育つ大学」という本学の理念を実践する学科であり続けたいと考えている。

生物資源管理学科の一年

岡野 寛治

生物資源管理学科長

学生の動向

2012年3月に63名の卒業生を送り出した。その内訳は、就職（および就職希望）が43名、大学院進学が19名（本学大学院14名、他大学大学院5名）であった。

また、2013年3月には64名の卒業生を送り出した。その内訳は、就職（および就職希望）が42名、大学院進学は14名であった。長いデフレ状況下で、今年も就職内定率は100%とならなかったが、来年度は求人が増えそうだというマスコミ報道に少し期待している。卒業時までにも、就職が決まらない学生が数名いたことは、大変気の毒であり、教職員の就職指導にいっそうの努力が必要であると痛感している。

学部では3回生の年末時から就職活動が開始され、4回生での卒業研究・ゼミに十分な時間を取ることができない現状が続いている。これまでも多くの先生が意見を述べられているが、大学の学士力

が企業等から熱望される中、学部と大学院の一体教育が必要な状況となっていると小生も考える。今般の家庭の経済状況から難しい面もあるが、大学院への進学率のいっそうの向上が望まれる。

2012年4月には61名の新生を迎えることができた。学年別の学生数は、2013年3月末で、1回生60名、2回生62名、3回生59名、4回生以上10名である。4回生以上の10名については、事情は様々で、休学して外国に語学研修に行った学生も含まれる。学生指導にあたっては、従来と大幅な変更はなく、単位の取得数の少ないと思われる学生には、各学生担任が連絡を取り、事情を聞くよう努めている。本学科では学生達とのコミュニケーションを出来る限り取るよう努めており、談話会（コンパ？）が学年ごとに随時設定され、意思疎通が図られている。今年も新入生歓迎会と忘年会が、1回生から4回生までの有志が参加して和気藹々で行われたことと併せて、これらの行事が本学科の伝統として根付いており、喜ばしいことである。

学生指導の改善

本年度も18名の教員で学生の指導を行ってきたが、本年度末に滋賀県立大学開学以来、本学科の教育・研究の大きな柱としてご奮闘頂いた長谷川先生と金木先生（誕生日順）が定年退職されることとなった。両先生には名誉教授として今後も活躍されんことを願っています。それに伴い2012年度当初から、カリキュラムの見直しと後任の教員の確保を行ってきた。新年度からは、新たな陣容で学生への教育と研究がより充実したものになるよう進めていきたいと考えている。

遡って、本年10月には全国公立大学農学会が、本学が当番校となり、開催された。限られた時間内で様々な話題について意見交換がなされた。特に本学から承合事項で提案した学部生の留年・休学状況について、私どもの生物資源管理学科の休学者および最低在学年限超過学生（留年生）数の割合が、他大学に比べてやや高い傾向にあるのではと心配したが、大差がないことが判明した。留年・休学には様々な事情が考えられるが、前述のように、教員が講義や実習の時に学生の動向を把握し、速やかに対応する必要がある。

最後となりましたが、本学科のみならず環境科学部での教育研究に重要な役割を果たしている圃場実験施設の井上氏と芝原氏も2012年度末にめでたく定年退職を迎えられた。しかしながら、両氏には来年度からも引き続き勤務していただくことになっていきますので、この学部報を読まれた卒業生の皆さん

にはご安心下さい。時折園場を訪ねて、変身した元気な皆さんの姿を見せて上げて下さい。

環境科学研究科

環境動態学専攻の一年

伴 修平

環境動態学専攻長

2012年度は、環境動態学専攻において、カリキュラムや履修に係る変更点がほとんどなく、それが故に、私のような新前専攻長でも何とかやってこれたのかもしれませんが。構成員の皆様の優しく、寛大なご支援に感謝するしだいです。しかし、来年度はルーブリックの作成など大きな変革が待ち構えています。更なるご協力をお願いしなければなりません。

さて、昨年度来、本専攻における学生の出入りはとても順調です。特に博士の学位取得者が増加傾向なのは大変喜ばしいかぎりです。本年度修了者は博士前期課程で19名、博士後期課程で4名でした。特に、博士後期課程を修了した4名全員が課程内の学位取得であったことはとても良い前例となりました。後進にとっても大変良いお手本になったことでしょう。さらに、これとは別途、2件の論文博士が授与され、合計6名の博士（環境科学）が誕生いたしました。環境科学分野での研究推進に大きく寄与することを期待したいと思います。一方、来年度の本専攻への進学者は、博士前期過程に24名、博士後期課程に5名と、いずれも定員を大きく上回りました。

教員にも若干の入れ替わりがありました。昨年10月には新任の田辺（細井）助教を迎えることができました。一方、この3月には長谷川、金木両教授を送り出すことになりました。ベテランを失うことは残念ですが、常なる新陳代謝こそが健全なシステムを形作るの、生物個体から生態系、そして大学の組織まで共通のセオリーに違いありません。

ところで、環境科学を推進する上で学際的な共同研究を行うことはとても大切です。しかし、これまでに本学で卓越した共同研究を行っているグループはそれほど多くありませんでした。そこで、本年度から拠点研究を設定することによって、これを中核とした研究体制を充実させてゆくことになりました。本専攻の教員が中心となって推進するのは、4つの拠点研究のうちの一つ「琵琶湖モデル構築に関する研究」です。私と須戸教授そして若干の若手教

員で以下の3つの研究課題を考えました：1) 琵琶湖から得られる持続可能な資源を利用した環境保全と里湖循環型社会の構築（研究代表者、伴 修平）、2) 琵琶湖への大気由来降水物のフラックスと湖沼生態系への影響評価（研究代表者、永淵 修）、3) 温暖化時代に対応した次世代型琵琶湖環境モニタリングシステムの構築（研究代表者、後藤直成）。少しでも関連する分野の方は積極的に参加して頂けることを希望します。また、異なる分野からの参加も大歓迎です。もちろん、皆様におかれましては、これらに限らず自らの研究活動を続けておられることと思いますが、これらを核として良い共同研究が始まることを期待いたします。

環境計画学専攻のこの一年

水原 涉

環境計画学専攻長

この1年3ヶ月間に限ってみると、本専攻では、特に大きな動きや問題はなかったと言えるだろう。ただ、幾つかの議論が上位機関から投げかけられており、今後、検討を進めていく必要があるテーマのうち、秋入学について触れておきたい。

大学を巡って少し議論になっている秋入学について本学大学院でも検討開始の動きが現れた。これは今年の学長の新年挨拶の中でも触れられており、国際化の中で内外双方向の学生、大学研究者の受入などの時期的利便性を考えてのことであるが、まずは大学院から検討して欲しいというものである。検討の結果は次期中期計画に反映されることになるのだろう。

隣国では韓国が春入学を実施している。中国は、過去に一気に小学校から大学まで秋入学に転換したようだ。ヨーロッパは昔から各教育段階で秋入学を採用している。秋入学に転換するのであれば、本来は、高校までの各段階でも実施すべきだ。そんな動きのない（あるいはそれが不可能な？）日本で、大学院だけで秋入学を取り込むことは並立制にならざるをえない。本専攻内でも入試や演習・研究といった授業の複雑化と教職員の負担増に結びつくが、それだけのメリットがあるのかなどの疑問点が出されている。

以下に、本専攻大学院学生の状況について、触れておく。

H24年度入学者は当専攻で前期課程22名（うち環境意匠研究部門では17名、環境地域経営では5